



見捨てることなく関わってくださるイエスさま

主教 ヨハネ 吉田 雅人

「主イエスの復活」という出来事は、誰にとってもなかなか理解しがたいことです。これは何も現代人に限ったことではなく、主イエスと同時代に生きた弟子たちも同様でした。彼らは復活の主イエスに出会ったにも関わらず、その人を主イエスと認めることが出来ませんでした。このことは死人の復活という出来事が、人間の知恵や理解力、あるいは見る・聞くと言った感覚を超えて起ったということを示しています。

では、ご復活の主との出会いとは、どのように起るのでしょうか。それはヨハネによる福音書第20章24節以下のディディモのトマスの物語からみてみましょう。

★ トマスの出会い

復活の日の夕方、十人の弟子たちはご復活の主イエスと出会いました。しかしディディモのトマスだけはその場におらず、他の弟子たちがトマスに、「わたしたちは主を見た」と告げても、トマスは「自分は主イエスの十字架の釘跡を見、そこに指を差し込まなければ、また槍で刺されたわき腹の傷に手を入れて見なければ、決して信じない」と主張します。この主張は、トマスという人が自分で触れて確認したもの以外は信じないという、極めて合理的な実証主義者であることを現わしています。

八日後、主イエスは再び弟子たちのところにおいてになります。今度はトマスも一緒でした。「あなたの目で見、手で触れてみなさい」と言われた主イエスに、トマスは「わたしの主、わたしの神よ」と告白したのです。

★ 見ないで信じれるか

トマスの体験は自分の目で見て確認し実証することこそ合理的、科学的であって、それのみが真実であると考えている現代人に、大きな問題を提起しているように思います。私達は、自分の目で見て確認し、実証したから信じるのでしょうか。必ずしもそうではなく、トマスが復活の主イエスの存在を信じ、確認したのは、自分の目で見、声を聞くということとは、もう一つ次元の違う事柄であったのではないのでしょうか。

随分前の話ですが、ある教会の牧師をしておりましたある日、教会の駐車場に見慣れぬ一台の黒のクラウン（年式は古かった）が入ってきました。誰だ

ろうと見てみると、一人の青年が車から降りてきて「仕事を失って困っている。金を貸してほしい」というのです。今までもそういう方はおられました。さすがに車を乗りつけてこられた方は初めてだったので、「お金を貸す前に乗ってきた車を売って、それでも困ったら来てください」と申し上げました。その方は思いのほか素直に引き下がられて、それから約1年が経ちました。また同じ黒のクラウンに乗ったその方がやって来られました。「エッ」と思って身構えていましたら、「去年、あのように言ってもらって、それから一生懸命働いたら、車を売ることなく何とかできました。ありがとうございました」とおっしゃるのです。

私はこのような展開になるとは思ってもみませんでした。でもそこに、この方に、何らかの力が働いたのでしょね。心の底では彼を信じていなかった自分自身が恥ずかしくなりました。

★ 体験と信仰を結ぶもの

トマスは「自分の目で見、手で触れて確認したもの以外は信じない」と言っていたのに、復活の主イエスに会った途端、それを自分の方法で確認することなしに、「私の主、私の神よ」と告白します。なぜトマスが信じる者にされたのでしょうか。それは主イエスが彼に関わってくださったからです。トマスに対して主は、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言われました。主イエスは、信じないからお前は駄目だ、認めないからお前は駄目だと見捨て、切り捨てることなく、私たちを受け入れて下さるのです。

主イエスが信じない自分をも大切に、受け入れて下さっているということが、彼に復活の主の真実を信じ、認めさせたのです。これは主の御姿を自分の目で確認することができない私達にも、そしてすべての人にも体験できることです。主イエスが私達を大切に、受け入れて下さったことを、私達は宣べ伝えるのです。言葉だけでなく、主が私達にもして下さったように、私達が他者を愛し、受け入れるを通して、その人と復活の主を結び付けるのです。私達はこのために召された小さな器です。この召しにかなうよう、感謝と喜びをもって主と他者に仕える者になりたいと思います。

(日本聖公会 東北教区前主教 本校卒業生)